

# 新聞に異変が起りつつある

木野工

今年、つまり昭和五十七年は、日本の新聞界にかなりの異変が起るのではないかと思う。主として日本全体の消費生活の変化がもたらす経済的な理由、新聞の立場から言くと経営的な理由からだが、新聞界内部の事情として、朝日、読売両紙の寡占状況が落ち着いたことにもよる。小部教紙が経営の限界部数を割っていながら、なんとか保ちこたえていたのにも限界が来ている。戦時中に新聞統合が強制され、一県一紙を建て前として、新聞、特に地方紙は地域的な特色を失ったが、戦後には様々の形で旧ローカル紙が一たんは復活した。ローカルカラーの濃い新聞が続々と誕生した。しかし、それも今や、一時的な現象と見なされるほどに数を減らし、大阪と九州での二紙

に次ぎ、今年は更に数紙が存立を危ぶまれている。こういう地方紙の衰退は、全国紙に圧倒されたことが原因であることは間違いないが、もっと根本的な原因は、商業紙であることの自覚が経営者にも編集者にも浅かった（現在でも依然そうなのだが）からである。現に地方紙で繁栄している新聞社は、いわゆる三プロック紙を除いてほとんどが商魂に徹した新聞作りと販売法をやっている。新聞の一面だけを見たのでは全国紙と変るところがないような紙面作りをしていて、力に雲泥の差がある大新聞の攻勢に耐えられるはずがない。特に夕刊には、取材力、署名原稿の質と量の差がはっきりと出る。ニュースは共同通信や時事通信に頼っているから、量の点では互角に見

える。しかし、単独で出費に耐えなければならぬ署名原稿と企画記事では太刀打ちできるわけがない。多少乱暴な書き方をすれば、十萬部の新聞が頼んでも六百萬部以上と自称する読売が頼んでも、作家や学者の稿料に50パーセントの差があればいいほうで、普通はほとんど同じである。

地方紙の夕刊は極端に部数が少ない。三十萬部から二十萬部の朝刊部数を持つ地方紙で、セット売り（つまり夕刊の部数。夕刊だけという読者は立売りだけと言っていない）部数が50パーセントを越えている新聞は、三プロック紙以外に皆無と言っているだろう。夕刊部数は各社とも秘中の秘である。広告料に大きな影響があるからである。自称三十萬部のある九州のある新聞では夕刊が三萬部弱、東北の同規模の新聞では僅かに二萬部を辛うじて保っていると直接に担当者から聞いた。大都会を勢力圏内に持たぬ新聞は、信じられぬほどにしか夕刊を出していない。つまり、総部数に関係なく、印刷されている都市の人口によって夕刊部数は制限されると言っている。今年の異変の一つは、この夕刊を朝刊とセットで宅

配するという日本独特の販売法をやめる、つまり夕刊をやめる地方紙が続出するのではないかと予想されることである。私の属する新聞は総部数二十五万部ほどだが、札幌と旭川という都市を圏内に持つため、夕刊部数が三分の一ほどある。それでも販売、広告の収入が製作費を賄えない。そのため、二月一日以降は朝刊だけにすることに踏みきった。そして、この事態に備え、紙名も発行社も全く異なる形で夕刊紙を別に発行する企画を先行させている。すでに三

カ月を経過しているが、広告収入は本紙と別途に調達できる利点も効果を挙げ始めているし、大変面白いことに、他社の（最も有名な全国紙である）専属販売店が、目下のところ発行部数の約25パーセントを引き受けて扱っている。どの位の割り合いかは知る由もないが、この新しい夕刊紙を娯楽紙と見なして、札幌市中心に自社紙の拡張材料に使っている。そういう状況が生れるほど地方での競争は甚が細かくなって来た。朝刊一本になった私の所属紙は、札幌の新聞、旭川の新聞に徹する編集で新機軸を出す方針で進んでいる。地方紙が物量で

押してくる全国紙、ブロック紙に抗して生きる道は、これ以外にないと思う。

英国の新聞は近代的な新聞の規範とされて来て、欧米の新聞界は英国の新聞界を原型に育って来たと言ってもいいと思うが、英国には朝夕刊セット売りという新聞はない。ニュースの報道と評論を主体とする朝刊紙は知識層が相手で、全国紙と地方紙の区別はあるが、ザ・タイムズがその典型例のように、いわば高級紙である。それに対して夕刊紙は娯楽、読み物を中心とした大衆紙で、大部数の全国紙も小部数の地方紙も、同じ地域では朝刊と比較にならぬほどの部数を保持している。高級紙である朝刊紙が大衆紙に比して部数の少ないのは理の当然で、オペラファンと演歌・歌謡曲ファンの例を引き合いに出すまでもない。日本では大部数紙が大新聞であり高級紙の扱いを受けているのは、実は大変おかしなことなのだが、今は触れない。ただ、日本の新聞界が、全国・地方と高級・大衆向けという四つに色分けされて行く傾向をやっと見せ始めた、とは言えるかもしれない。

日本には、スポーツ紙の名で呼ばれる不

思議な娯楽紙（大半は夕刊紙）がある。このスポーツ紙の中へ、一般の夕刊紙が割り込みを策し始めると言ってもいいだろう。変に気取って、無冠の帝王などというプライドに支えられていた地方紙が、露骨に商業性を発揮せざるを得ないところへ来ていると見てもいい。そして、恐らく法的規制を何らかの形で越えた新企画が、先ず地方の新聞に起る可能性が強い。売らんなかの企画と言えば、エロとギャンブルである。そして、そのお手本はすでに欧米にいやというほどある。英国の大衆紙は社運を賭して目下紙上『ビンゴ』に血道をあげている。賞金はウナギ上りに上って、すでに百万ポント（日本円で四億五千万円ほど）はスター、エキस्पレス、ミラーなど数紙、サンが遂に百三十万ポンド出している。日本では、かつて刷りこみ投票用紙による『美人投票』が熱狂を呼んだが、今年はずらず、こんな形の、新聞を大量に買わせる紙上ギャンブルが発生すると思う。変な、厭な、時代になる予感がある。